

「スタンダードテキスト 腹腔鏡下外科手術

Surgical Laparoscopy

Karl A. Zucker 著

東京大学教授・第2外科

出月 康夫

東京大学講師・第2外科

万代 恭嗣

監訳

新潟大学・学長

武 藤 輝 一

内視鏡下外科手術はわが国でも急速に普及しつつあり、明年6月京都において出月康夫会長の主宰で第4回世界内視鏡外科学会が開催されることになった。特に腹腔鏡下胆嚢摘出術は病院の大きさを問わず、ほとんどの病院で実施されている。腹腔鏡下手術は早くから婦人科領域で行われ、パイオニアである Kiel 大学の Kunt Semm 教授の施設では現在75%の婦人科手術が腹腔鏡下で行われていることをいう。私は1988年夏、Kiel 大学外科を訪れ小腸移植の臨床成功例を見たが、このときに婦人科の腹腔鏡下手術を見せてもらっていればと今になって悔んでいる次第である。

本書“Surgical Laparoscopy”は Karl A. Zucker 准教授の編集によるもので、執筆には Zucker 准教授一門の人達が多い。高名な方々の分担執筆ではなく、現在まで腹腔鏡下手術の第一線で苦勞し、豊かな経験を持ち、優れた治療成績を挙げた、若手も含めた専門の方々執筆しているところに意義がある。その理由は、本書の重点を手術手技の実際とそれに関連する項目においたところにある。

基礎的事項 (Part 1) は比較的短い

が、腹腔鏡下各種術式の歴史的展開がコンパクトに記載され、電気メスやレーザーを含めた機器、麻酔の実際、腹腔鏡挿入手技など必須事項は洩らさぬように写真で示しながらわかりやすく述べられている。臨床 (Part 2) が主のため7割以上の頁がここに充当されている。腹腔鏡下の消化器癌の診断と胆石症に対する治療法の選択に続く腹腔鏡下の各種術式、すなわち電気メスおよびレーザーを用いた胆嚢摘出術、総胆管結石の治療、虫垂切除術、骨盤内リンパ節切除、迷走神経切離術、鼠経ヘルニア手術、腸管手術などが本書の柱でもある。

手術の実際についてカラーの図、カラー写真、白黒の図や写真、手術室内の写真が多く、しかも文章に合わせてわかりやすく組み込まれており、理解が大変容易である。痒いところに手が届く懇切丁寧な説明である。多少の重複も忘れてはならない大切な事項であり、内容の重要さが身に染みてわかる。そして、それぞれの手術のあとに必要な文献が記載されていて有り難い。合併症にもかなりの頁が割かれていることは、このような合併症を起こさないように留意なさいということの裏返しで

もある。開腹術に勝るには合併症もみなければならない。実施の前に合併症の項を熟読していただきたい。最後に記述されている“腹腔鏡下手術は外科医が行うべきで、外科医の研修の中に本手術のトレーニングを組み込むべき”と“トレーニングと資格認定をいかに行うべきか”は日本消化器外科学会の認定医制度に示唆を与えるものである。

編集者の Zucker 准教授、翻訳者代表の出月教授が述べておられるごとく、まさに腹腔鏡下手術の手技を学ぼうとする外科医にとってよき指針となる包括的かつ実的な参考書として推奨したい。翻訳書の価値は翻訳者の力量によって左右される。本書は内視鏡下外科手術に造詣の深い出月康夫教授、ならびにご一門の方々によって翻訳されているため、文章は大変平易かつ的確でわかりやすい。そのため、Zucker 准教授の考え以上に本書が生かされているように思う。21世紀に向けて腹腔鏡下外科手術の著しい発展に期待しつつ、本書推薦の言葉とする。

● B5 328頁 図88 写真83
原色図79 1993 定価18,540円
(税込) 円400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)